

**外部評価委員による
新潟薬科大学応用生命科学部
自己点検・評価結果**

【平成19年度(平成19年4月1日～平成20年3月31日)】

新潟薬科大学
応用生命科学部

はじめに

平成 19 年度外部評価の結果をお届けします。

応用生命科学部では、開設の平成 14 年度年度から学生による授業評価を実施し、平成 16 年度から自己点検・評価表を作成して教員個人と委員会活動、センター運営、施設運営にかんする自主的な評価を行ってきました。開設からの 6 年を顧み、今後の発展を図るために、今年度から外部評価委員による応用生命科学部の評価を実施することとしました。

外部評価委員として次の 3 名の先生方をお願いしました。

寺田 弘先生 東京理科大学薬学部薬効物理化学教室教授
東京理科大学総合研究機構 DDS 研究センター長
濱口 哲先生 新潟大学理学部自然環境科学科・自然科学研究科環境共生科学専攻
教授、新潟大学副学長
服部良男先生 応用生命科学部客員教授

大学評価は平成 19 年度に大学基準協会によって実施されましたので、今回は外部評価委員の先生方に平成 19 年度の教員個人の教育・研究・社会活動評価、委員会・各種施設・産官学連携推進センターの活動・運営についての評価および学部の教育研究体制と財務などに関するコメントをお願いしました。さらに平成 21 年 1 月 14 日には本学までお越しいただいて、施設設備の現地視察と委員会関係者との意見交換の後、教職員に対して総評を賜りました。

ここにとりまとめた内容を個人あるいは組織として真摯に受け止めて具体的に教育、研究、社会活動に反映させる方策を考えて実践に移し、学生、学生の保護者、地域、産業界の期待に応える応用生命科学部を築きあげることが外部評価を生かすために重要です。

評価表作成、現地視察に協力いただいた教員各位、お世話をいただいた事務職員の皆様、そして情熱的に評価していただきました外部評価委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

平成 21 年 1 月 30 日
新潟薬科大学応用生命科学部
自己点検・評価委員会
委員長 平岡 昇

目 次

外部評価の日程	3
外部評価委員による総評	7
教育・研究体制等に関するコメント	9
委員会、センター、施設に対する評価	2 1

外部評価の日程

1 外部評価者

寺田 弘（東京理科大学教授）、濱口 哲（新潟大学教授）、服部 良男（本学客員教授）

2 評価日程

実施日	平成 21 年 1 月 14 日（水）
外部評価委員到着 学長室へ	13 時頃
大学施設見学	13:30 ~ 14:30
各種委員会委員長等との質疑応答（会議室）	14:45 ~ 16:00
教職員との懇談（B302 教室）	16:15 ~ 17:00

助手以上 + 事務部課長以上

3 被評価者（下線は大学の委員会、は平成 20 年度に変更した委員会、委員長）

委員会名等	平成 19 年度	平成 20 年度
学長	山崎 幹夫	山崎 幹夫
学部長	平岡 昇	平岡 昇
教務	波田野 義比古	波田野 義比古
学生	太田 達夫	太田 達夫
入試	藤井 智幸	武内 征司
広報 <u>同左</u>	藤井 智幸	山崎 幹夫
予算	平岡 昇	平岡 昇
プロジェクト関連 <u>国際交流</u>	及川 紀久雄	及川 紀久雄
共通機器 <u>共同利用機器施設</u>	鯨坂 勝美	石黒 正路
実験動物施設 <u>動物実験</u>	佐藤 眞治	佐藤 眞治
組換え DNA 実験安全 <u>同左</u>	梨本 正之	高久 洋暁
RI <u>同左</u>	梨本 正之	梨本 正之
図書委員会	三宅 紀子	三宅 紀子
図書館運営	武内 征司	武内 征司
地域交流 <u>産官学連携推進センターへ</u>	小西 徹也	小西 徹也
IT	米田 照代	米田 照代
防災環境 <u>防災</u>	川田 邦明	川田 邦明
自己評価 <u>自己点検・評価</u>	佐藤 眞治	平岡 昇
就職	武内 征司	浦上 弘
倫理審査 <u>同左</u>	浦上 弘	浦上 弘
大学院教務	小西 徹也	梨本 正之
大学院入試	梨本 正之	石黒 正路
博士後期課程設置	浦上 弘	浦上 弘

将来計画	平岡 昇	平岡 昇
FD	武内 征司	武内 征司
産官学連携推進センター	小西 徹也	小西 徹也

自己点検・評価委員

平岡 昇、武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治
 薬学部長、薬学部自己点検・評価委員長（オブザーバー）
 北川 幸己

事務職員

鈴木 正利（事務部長代理）
 太田 卓馬（学生課長）
 生野 昭雄（教務課長）
 茂木 弘邦（庶務課長）
 大井 宰（入試・広報課長）
 川崎 有紀（庶務課企画係長）

外部評価座席配置図

	寺田先生	濱口先生	服部先生	
太田	学生委員長 (生物学 教授)		学長、広報委員長	山崎
波田野	教務委員長 (化学 教授)		学部長、自己点検・評価委員長 予算委員長、将来計画委員長 (植物資源学・細胞工学 教授)	平岡
及川	国際交流委員長 (環境安全科学 教授)		図書館長、入試委員長、FD 委員長 (生物分子科学 教授)	武内
重松	大学院入試委員 (食品製造・食品工学 准教授)		就職委員長、倫理審査委員 (食品微生物・食品安全学 教授)	浦上
梨本	大学院教務委員長、RI 施設運営委員 (応用微生物・遺伝子工学 教授)		産官学連携推進センター運営委員長 (食品機能科学・食品分析科学 教授)	小西
川田	防災委員 (環境安全科学 准教授)		組換え DNA 実験安全委員長 (応用微生物・遺伝子工学 准教授)	高久
佐藤	共通機器委員、動物実験委員 (食品機能科学 准教授)		IT 委員長 (生物機能化学 准教授)	米田
北川	薬学部長		図書委員長 (栄養科学 准教授)	三宅
	鈴木 太田	生野 茂木	大井 長越 川崎	

資料一覧

<平成 19 年度大学基準協会による大学評価資料>

- 1) 2007 (平成 19) 年度 点検・評価報告書
- 2) 新潟薬科大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果
- 3) 大学基礎データ
- 4) 専任教員の教育・研究業績 2006 (平成 18) 年 5 月 1 日現在
- 5) 2007 (平成 19) 年度 点検・評価報告書 (データ集)

<上記以外の評価資料 (大学基準協会提出資料に準拠) >

- 1) 学生募集要項 (平成 21 年度版)
2009 学生募集要項 (薬学部・応用生命科学部)
平成 21 年度 (2009 年度) 学生募集要項 (応用生命科学研究科博士前期課程)
平成 21 年度学生募集要項 (薬学研究科博士前期課程)
- 2) 大学案内、パンフレット等 (平成 20 年度版)
2009 CAMPUS GUIDE
産官学連携推進センターパンフレット
新潟薬科大学図書館利用案内
新潟薬科大学応用生命科学部 就活ガイドブック
就活事典 新潟薬科大学薬学部 就職ガイドブック
薬学生のための就職活動応援本 めでいしーん VOICE 新潟薬科大学
カウセンリングの勧め
- 3) 履修関係資料 (評価対象年度である平成 19 年度版)
平成 19 年度 (2007 年) 学生便覧
2007 講義要項 (シラバス) (応用生命科学部、薬学部)
2007 講義要項 (応用生命科学研究科、薬学研究科)
平成 19 年度 (2007 年度) オリエンテーション資料 (応用生命科学部)
平成 19 年度 (2007 年度) オリエンテーション資料 (薬学部)
- 4) 学則等 (平成 20 年度現在施行のもの)
寄付行為、学則 (学生便覧)、規定等
- 6) 学部が独自に作成した自己点検・評価報告書等
自己点検・評価表 平成 16・17 年度 新潟薬科大学応用生命科学部
自己点検・評価表 平成 18 年度 新潟薬科大学応用生命科学部
自己点検・評価表 平成 19 年度 新潟薬科大学応用生命科学部
平成 19 年度前期 応用生命科学部生による授業評価結果
- 7) 財務関係書類

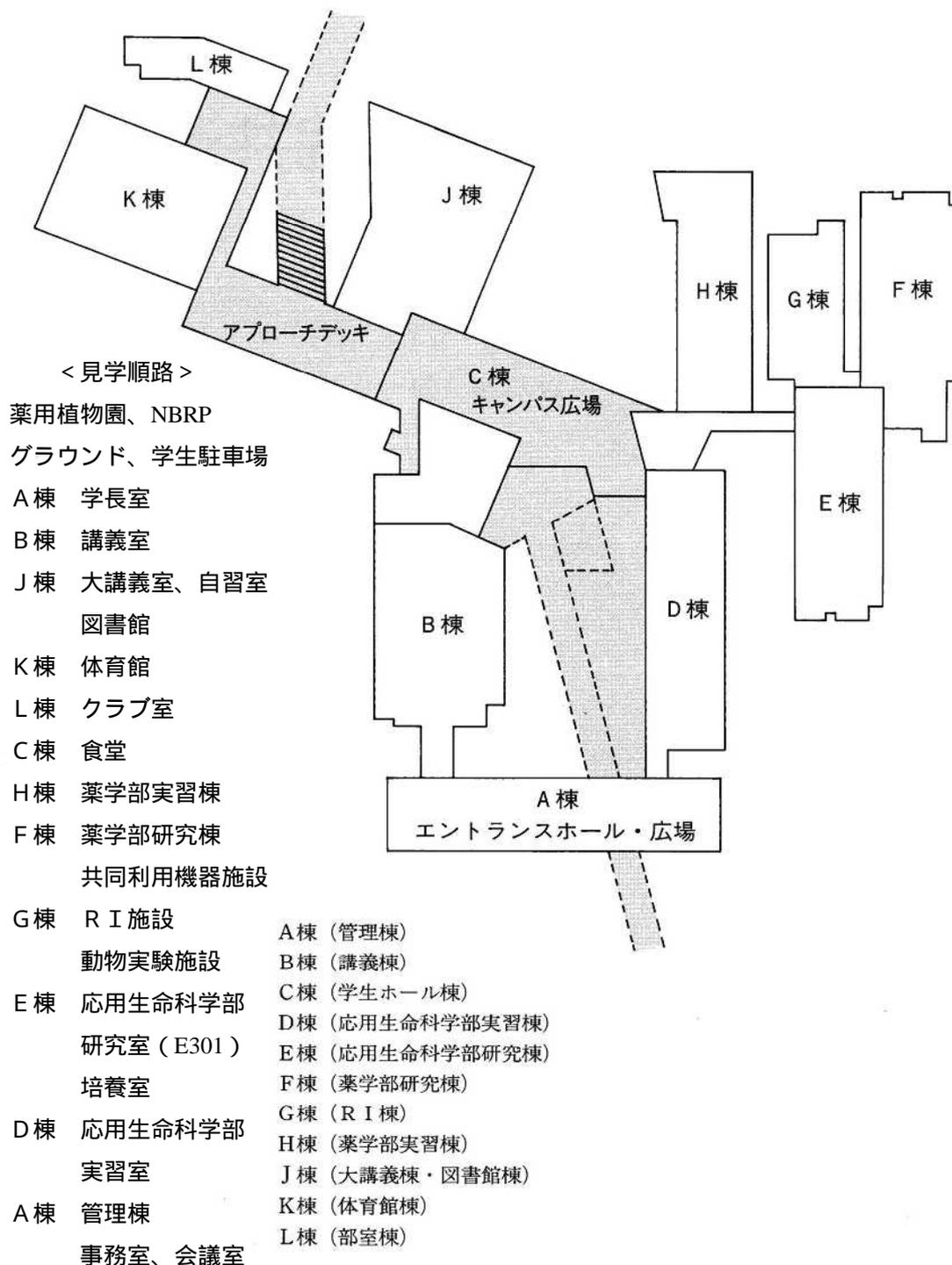
決算書(17・18・19年度)

8) その他

新潟薬大ニュース

外部評価委員施設見学(平成21年1月14日(水)13:30~14:30)

校舎配置図および教室等案内



外部評価委員による総評

平成 21 年 1 月 14 日

於：B 3 0 2 教室

A 評価委員

「応用」生命科学部であって生命科学部ではない。教員の研究に対する姿勢も「応用」を意識したものとなるであろう。着地点が「実用化」に傾きがちになるが、きちんとした研究を行ってほしい。

生命を中心にして応用生命科学部と薬学部でうまく住み分け、分担しながらインテグレーションして行ってほしい。

委員長との質疑応答ではいろんな組織が機能的にシンクロナイズされているのかともどかしく感じた。この大学は地域立脚から世界に広げるというスタンスが望ましいように思うが、地域との連携は何をやってもいいわけではなく目的が必要で、地域の知的な要求に応え、実益をもたらし、それをサイエンスにつなげていくことが重要ではないか。

教員が限られ、予算が限られる中で、筋になる議論はなされているのか。軸は何か。いくつかのキーワードはあがっているが、それをどうコンビネーションするのか。薬学部と共同でやる部分と独自でやっていく部分をどう整理していくかが重要である。

サイエンス自体は無力であるが、それを支えるのは技術である。技術とサイエンスの関係をうまく保ち、地域から情報を発信して行って欲しい。

B 評価委員

今日の大学教育は、学問分野に基礎を置くより学生に何を身に付けさせるかを明確にした有機的なカリキュラムを構成しなければならないという傾向にある。

最近の学生はガイドしてやらないとなかなか動かないから、到達目標やどういったことができるようになるのか、学部として何を身につけさせて社会に送り出すのかということ整理し、明確にしたカリキュラムを組んでみてはどうか。

C 評価委員

この大学の一番の問題は財政が厳しく教員の補充ができない点、多種多様な学生に対応しなければならないという点であろう。教員が教育・研究に専念するため、なくても済むような委員会はなくしたり統合したりして、シンプルな組織にしていきたい。

学生による授業評価や委員会に対する評価は、公表したりそれらを学内における個人の業績評価に使用するよりも、教員自身がそれらのデータを、教育・研究を改善するためのデータ、注意点であると認識して、個人的に利用していけばよいのではないか。

個々の委員会活動や担当授業数にバラつきがあるので、これは平準化していた

だきたい。また、助教をこれらにさらに参画させ、経験をつんでもらうことについて、積極的にとらえていただきたい。

資格を取らせるための科目が増え、カリキュラムの中でオーバーラップしている部分が多い。学部学生をどのように育てるのか、どのように研究者を育成していくのかを考えて整理していただきたい。

教育・研究体制等に関するコメント

A 評価委員

1. 応用生物科学部のキーワードは“生命”と“食品”、“環境”、“健康”である。
2. 薬学部キーワードは、“薬品”、“健康”、“環境”である。
3. 両学部は共通点を多く持っているので、互いに連携しながら機能分化と機能統合を行うといいと思うが、現実には必ずしもその様な形になっていないのではないか。
4. 例えば、“薬食同源”は、両者のリンクを行うのにいいキーワードになるのではないか。薬草園の運営などにもその精神を入れると良い。
5. 個々の教員は一定（以上）の成果をあげている場合が多いことは喜ばしいが、これを学部、もしくは大学の共通理念に基づいてインテグレーションすることは行われていないように見受けられる。
6. 個々のユニットがいくら強化されても、その連携が行われないと、サイエンスは進化しないのではないか。
7. その“繋ぎ”の中心となるコンセプトは、“情報”なのではないか。
8. 入学志願者は減少する傾向にあるが、その主たる要因は県外志願者の減少である。
9. その一方で、就職状況は極めて良好であると言える。新潟県を中心にした地域への就職が良いからであろう。
10. 新潟県を中心にした“地域密着型”の大学構築が必要となるのではないか。
11. そのためにも、新潟薬大が地域の発展に如何に貢献しているかを広報する必要があるとともに、地域からの信用を勝ち得るようにしないといけない。
12. それと同時に、地域に根ざしたサイエンスが必要であると考えます。

B 評価委員

学部として、教員個人および各委員会の活動について自己点検・評価を行い、その外部評価を継続的に行う体制を整備されていることには、敬意を表したいと思います。さまざまな困難がある中で、活発な研究活動が行われ、また、個人にまで目の届く教育活動が行われていることを伺い知ることができました。

教育全般では、学生便覧で学部の特徴が述べられ、教育として教育目標とカリキュラムの考え方が書かれています。しかし、それらはやや抽象的なものに留まっています。それらをもう少し具体的な学生の能力という観点で具体化（行動目標化）し、それとカリキュラムを構成する授業科目の関係がある程度学生が理解できるように示すことが出来れば、学生の学習の動機付け、あるいは学生が主体的な学習を行う助けとなるのではないかと思います。次期のカリキュラム改革が日程にあるようにも見えますので、その折にはそのような方向での学習の到達目標および授業科目の整理が行われると、学生

にとっては有益なのではないかと思えます。

各先生方が書かれているコメントを拝読すると、そこにはさまざまな教育課題の指摘を見ることが出来ました。それらを拾い集めて、カリキュラム体系全体の改革に結びつけることが出来れば、素晴らしいのではないかと思いました。(前段で教育の枠組みの改革の方向性について言及しましたが、実はそのような枠組みの議論から入るより、実質的な改革が出来るのではないかとすら思いました。)

各先生方のコメントの中には、昨今の諸答申などで指摘されている課題のほとんどが含まれていたように思います。「カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシーに貫かれた到達目標達成型の教育を実現する」ための重要な指摘も含まれていましたし、「学生の多様化に即した学習支援の必要性」の指摘もありました。さらに、「初年次教育の充実」の必要性、「低学年次でのキャリア教育の重要性」などについても言及がありました。

そういう意味では、「自己点検・評価表」のデータに基づいた、学部としての総合的な自己評価・点検を行うことが極めて重要ではないかと思えます。その点検結果について外部評価委員してコメントさせて頂ければ、さらに、評価・改善、あるいは実務的なFD活動に、さらに実のある協力をさせて頂くことになるのではないかと思いました。

C 評価委員

本コメントは、主として平成19年度の資料をもとに行った。カリキュラムに関しては、平成20年度のシラバス、学生便覧などを参考に実施した。大学基準協会の評価は、文科省指導方針に準拠した分析によって、評価が実施されている。その中には、大学の理想に近い意見、提言があり、貴大学の実状から見て、厳しい指摘もある。本評価に当たっては、基準協会の評価とは、出来るだけ重複を避けてのコメントを述べる。

1. 管理運営と財務

(1) 管理運営・組織

学校法人は企業で言えば、持株会社(HD)に相当し、最高決定機関として理事会が存在し、全体の経営を監督する。大学、専門学校はHDに所属する会社に相当し、学長のもと、教育・研究活動を行い、個々の経営に責任がある。

法人全体が有効に活動を進めるため各種組織が設置され、上位から、理事会、評議員会、部局長会、教授会、委員会が設置されている。それぞれの役割は規程されているが、今ひとつ、権限と責任が明確でない。屋上屋を重ねないため、それぞれの組織の決定基準を明確に決めておくことを推奨する。

又、評議員会の役割は、理事会と重複しているようであり、その必要性に疑問を感じる。特に、応用生命科学部の財政が十分といえない中、教員の補充などが厳しい状況にある。教員の多くは上記の各会に所属して、時間を取られている。たとえ

評議員会が必要としても、理事会、評議委員会には、学長、学部長の参加で十分であり、その他の教員が研究、教育活動に力を入れるためにも、評議員会、教授会のメンバー構成の検討を願いたい。会議は出来るだけシンプルな組織で、迅速な決定ができることが望ましい。

(2) 財務状況と資金確保

大学の教育、研究を支えるのは、安定した経営・健全な財務である。応用生命科学部の財務状況は薬学部と比較して極めて脆弱である。全入時代を迎え、受験者数の増加、定員割れの防止は重要である。そのための対策が優先課題として求められている。

貴学部の財務状況を見ると、収入はほぼ固定的で、受験料、学生納付金、私学補助金が主収入源であり、受験者数の減少、定員制限から、今後も収入増は期待できない。定員増は定員割れの危険性、教員の負担増、そのための教員の増員などの問題がある。

一方、支出では、開学部以降の研究室の増加、教員の増加、准教授制採用に伴う教員の昇任からくる人件費増が認められる。人件費は、今後も増えることはあっても減少することは期待できない。平成19年度以降の予算を拝見しても、教員の補充が出来ない予算となっている。また、研究経費、管理経費もエネルギー費用の上昇により、増加の可能性が高い。

外部資金の獲得は、各研究室共に年度ごとに増加しているが、一部の研究室では十分とはいえない。さらに前向きな取り組みを期待したい。将来的には、米国の大学と同様な外部資金による研究費獲得を行い、大学からの研究費支給を無くすか削減する道を目指したい。

一方、事務職員の人件費は、微増であるが増加しているので、固定費を抑え、アウトソーシングを進め、固定的人件費の抑制を図りたい。企業とは異なり、大学では、賃金カット、賞与のダウンは研究、教育活動の活力を減少させることから実施は困難であろう。

中学、高校へのSPP,SSH、出張授業、高校訪問など活発な活動を行っていることは評価できる。これらの活動が、受験生獲得に寄与しているかを分析し、その結果をフィードバックして、今後の受験生獲得に活かして欲しい。限られた広報費の費用対効果を調べ、重点的に配分されたい。

(3) 財務三表の公開

大学基準協会による評価で、財務三表の公開について広報誌への掲載が助言されている。現在の受験生、高校及び父兄向けの広報関係の資料は、充実していて、財務三表の公開が受験者増に効果があるとは考えられない。むしろ、卒業生の就職状

況、社会での活動状況をさらに充実させると共に生命科学部の理念、教育方針を判りやすく発信していくことが必要と思われる。

受験生、高校、父兄への広報は、貴大学が他の大学に比べ、どのような差別性があるかを、判りやすい「セリング・ポイント」を全面に出して発信すべきであると考えられる。

また、他の大学が行っているマスコミを使った広報は、貴大学では予算上厳しいので、HPを使った広報活動が、特に県外の受験者に有効であると思われる。

(4) 固定費と施設・設備関係支出

教育・研究に欠かせない薬学部との共通設備について、保守、点検、維持、大型新設備の購入を共通委員会で検討されるように整備されたい。開学部当初から、財務上問題になっている施設関係の支出であるが、第2期工事以降の負担、支出が財務上どのような影響を及ぼすか、教職員全員に開示すべきである。(年度別の支出、薬学部との負担割合など、用意された資料では不明である)

(5) 予算の中長期計画の作成

今後も一定の収入しか見込まれない中、支出が増大する固定人件費、教員補充、施設・設備関係費用、管理経費、広報費用など、安定した経営に関する課題は多大である。後期博士課程が始まるに当たり、応用生命科学部として、教育、研究の質を保つための中長期予算計画を策定し、教職員全員への認識の一致、周知徹底を図ることを推奨する。

2. 教育内容・方法

(1) 多くの教員から指摘されている基礎学力の低下は、全入時代を迎えるに当たって、応用生命科学部にとっても重要課題である。基礎学力が低下している学生のレベルアップとして、基礎学科の増加、基礎演習の新設、英語教科の充実など、カリキュラムの改正に取り組んでいることは評価できる。

一方で、基礎教科の増設によって、担当教員の負担増、専門選択科目の受講への影響が生じていることは否めない。

また、学力に大きな差がある学生のどの層に焦点を合わせていくか、学部内での意志統一が必要である。

入試成績や入学後の基礎学力試験の実施による個々の学生の学力把握を行い、特に学力の低い学生には、アドバイザーや、補講による対応が必要と思われる。それらによって、基礎科目の時間短縮、教員の負荷の減少が期待される。

(2) 基礎学科の増設によって、専門科目のカリキュラム編成に一部無理が生じている

ようである。基礎学力が伴わないまま、1学年に一部専門科目が含まれていて、学生の授業評価でも、内容が理解しにくく、難しいとの指摘がなされているので是正を望みたい。

- (3) 社会科学、人文科学、英語以外の外国語等の教養科目は1学年に集中させ、学部共通の専門科目は、2年前期までに配置し、2年後期から、各学科で必要とされる専門必須科目、専門選択科目を配置したい。また、3学年後半の研究室配属後に、各研究室から重点受講を推薦される指定専門選択科目を配置したカリキュラム編成について討議をお願いしたい。

基礎学力確保のための科目や実習が多いこと、1年半の卒研、就職活動、教員の確保などの制限があるなか困難と思うが、次回以降のカリキュラム見直しで検討されたい。

- (4) 一部の教員から意見が出されている教員毎の担当時間の差は、担当科目のコマ数の分析からも認められる。また、研究室の増加、各資格養成に必要な科目の増加もその原因の一つである。各教員の研究活動にも影響するので、是正されたい。是正手段として、シラバスから散見される講義内容の重複を是正することによる科目の削減、准教授、助教の講義担当などが挙げられる。特に、環境、安全、資源関係、食品の機能、添加物関連等に、内容の重複が認められる。これらの是正を行うには、シラバスの記載内容からは、各教員、講師がどのような内容を講義しているか、お互いに見えない状況であるので困難を伴うが、検討をお願いしたい。

教員毎の担当コマ数について、教員の自己点検・評価表の記載が統一されていないこと(コマ数の記載漏れ、1コマ時間が明確でないことから教員間でばらつきがある)、実習担当のそれぞれの実質担当コマ数が不明なことが見受けられるので統一されたものに是正されたい。

- (5) 大学院がスタートした今、大学の研究員を目指す学生、企業などに就職を目指す学生の指導は所属研究室で行うべきであるが、それぞれの学生に受講すべき選択科目についての助言をお願いしたい。

- (6) 基礎科目、実習、必須科目、選択科目など多彩なカリキュラムが用意されて、教育に力を入れていることは評価されるが、学生の負荷も大きく、学内、学外での自由活動時間が出来にくくなっている。社会的な活動(ボランティア、サークル活動、他大学との交流など)の時間の創出が望まれる。

- (7) 管理栄養士養成指定の検討、医専の学部申請の検討がされているとのことである

が、管理栄養士養成指定には、調理実習施設の新設、教科の増加など多大な費用は予想される。現状の財政状態から見て、単独で実施することなく、検討課題となっている新潟医療福祉大学との連携、相互単位取得の方向で進むことを進言したい。医専の学部化についても大学の将来計画の中で事業性を十分に検討して進めて欲しい。

- (8) 資格認定試験の受験資格に係わる科目が相当増加している。(食品衛生管理者、食品衛生管理員、NR、フードスペシャリスト)そのため、外部講師の担当科目も多くなってはいるが、学部教員が担当す科目も増加して負担が増えていることも無視できない。さらに、将来、管理栄養士についても検討されているようである。学生にとって、本当に必要な資格はどうか?学部としてどこまで資格認定のための科目を用意するのか?学部全体で考えるべき時期に来ていると思われる。

資格には、国家資格、公的資格、民間資格、公務員試験など1000を越資格があり、全てが、社会的に認められ、就職に有利に働くものではない。又、企業に就職した場合、職務に必要な資格で企業から求められるものは、勤務の傍ら受験できるようになっている。

資格認定の受験資格については、広報の中でも取り上げられ、受験生への売りの一つになっている。そのため、一度、設定したものは、廃止することは困難であろう。したがって、大学での資格認定の受験資格に関する問題は必要性、重要性、効果を十分に考慮して取り組みたい。

3. 自己点検・評価体制

- (1) 自己点検・評価制度は全学的に整備され、取り組まれていることは評価したい。大学基準協会から指摘されている自己点検・評価の結果を広く社会に公表されたいとの指摘についてはやや異論を挟むものであり、その結果を活かして学内独自で改善を図るものと考え。企業内でも、社員の評価を社会に公表はしていない。大学の教職員、それぞれが、評価を受け入れ、自己研鑽、改善に利用すべきものと考え。

- (2) 学生による評価についても、それぞれの教員が前向きに捉え、よりよい方向に向けて活用されるべきである。然し、学生の評価は、全て正しいものではなく、無責任なものもある。

授業の評価を改善に向けてより良くするためには、教員から見た評価も実施し、学生から見た採点と併せて、それぞれが、その結果を基に改善に向かって進むことが望まれる。

(3) 評価は、いかなる組織であろうが、完成されたものはなく、其れを人事考課に結びつけることは大変難しい。成果主義による考課が企業で採用されてきたが大部分失敗しているのが現状である。

特に教育機関に於ける教員の評価は、大変難しく、それぞれの研究室の性格、成員、担当教科の数、担当委員会の活動など、一概に比較できるものではありません。従って、本評価のスコアそのもので教員の評価を進めるのは問題があります。

参考までに、多くの企業で行われている自己啓発、評価制度を紹介する。自己啓発は、様々な項目について、本人自らの採点、同期数名、部下数名、上司数名の採点がなされ、それぞれの採点の相違を分析し、自己啓発するための行動指針を本人が作成、数年に亘って繰り返され自己啓発をしていく方法も採られている。

評価は、目標管理表で自ら課した目標の達成について、上司との話し合いの結果で、目標の達成度、難易度、努力度、勤務状態、会社への提言、部下の育成など総合的に採点して決定される。

本外部評価においても、単純にスコアのみで判断すべきでなく、その内容を活かして、前向きに進む方向で活用して欲しい。

4. 研究業績

(1) 平成19年度の実績は発表論文53, 学会発表152, 特許出願11と高い業績を上げている。単年度での比較であるが、教員間でその業績には差があり、更なる研究業績の向上を期待したい。科研費、外部資金の獲得にも年々力を入れていることが見受けられ頼もしく感じられる。

(2) 論文、学会発表の評価の中で留意すべき点は、単に数が多いということではなく、その内容がその学問領域でどのような地位にあるか、創造性が高く先端を行くものであるかということである。今回や過去の日本のノーベル賞受賞者が、日本であまり認められず、世界で認められ、慌てて文化勲章、文化功労賞を授与される例を見ても、研究者の業績評価は非常に難しい。

(3) 研究成果と権利の帰属について

外部からの資金導入、研究成果の実用化、特許の取得などが次第に増加していく中、共同研究における契約、実用化の際の権利の帰属など、大学として明確に規定しておく必要がある。また、発明が実用化された場合の帰属、教員の報奨制度も検討されたい。

又、特許の出願、権利保持には多大な費用がかかる。毎年、特許などの見直しを行い、権利継続の是非を検討されたい。その基準は将来金になるか、企業が買いに来るかで判断されたい。その判断は難しいが、将来、実用化が期待できない知的所

有権は、費用を発生するだけで意味がない。

- (4) 科研費、受託研究費など、各研究室で管理されているものについては不正処理がないよう、会計管理を周知徹底されたい。

5. 委員会

- (1) 学部創設以来、発生する様々な問題に対応すべく、多くの委員会が誕生し、役割を果たしてきた。平成19年度では24の委員会が運営されてきた。今後も学部の発展に伴い、増加するものと考えられる。委員会の成員は教授、准教授で構成されているが、その負荷は大きく、教育、研究への影響も相当なものになっている。従って、現在の委員会の再編成に向けて検討を進めることを提唱したい。

委員会の活動内容、構成委員が類似しているものは、統合して、少人数での委員会に再編し、教員の負荷を減少したい。又、大学全体に係わるもので、薬学部とも関連する委員会は合同委員会に再編して、構成員の減員を進めたい。現在、一部の委員会に、薬学部との併合が進められているが、さらに推進して欲しい。

併合、統合を検討されたい委員会

教務委員会、大学院教務委員会、FD委員会。

入試委員会、広報委員会、大学院入試委員会。

予算委員会と将来計画委員会。

図書館委員会と図書館運営委員会。

薬学部との合同委員会を検討したい委員会

共通機器委員会、組み換えDNA委員会、実験動物施設委員会（実施済み）、RI委員会、防災・環境委員会。

活動内容からみて、他の委員会などに併合したい委員会

プロジェクト関連委員会。

- (2) 委員会の成員は、教授、准教授で構成されているが、助教の参画を提唱したい。助教の参画が規程上問題あるならば、規程が改正されることを望みたい。

6. 社会貢献

- (1) 地域貢献

SPP、SSHなどの高大連携活動、出張講義、地域交流講座の開催など、着実に地域貢献を進めていることは評価できる。平成18年度からスタートした産官学連携推進センターの活動も今後に向かって期待したい。

- (2) 国際交流

2、3の教員から国際交流に関して、その必要性和予算がないことが指摘されている。学部の財政状況から対応が出来ていないことは残念であるが、経営状況が安定するまで、莫大な費用がかかる国際シンポジウムなどは、当面外部資金に頼って、開催することになろう。将来的には、国際交流は重要なので、中長期計画の中で優先順位を考慮しつつ検討されたい。又、資金的に余裕のある薬学部のシンポジウムに参加することも考えられる。国際シンポジウムは、東京、大阪を始め、大都市で数多く開催されている。それらに参加することも可能であろう。もし、新潟で開催する場合には、そのテーマ、差別化、特殊性、スポンサー、参加者などを考慮する事も必要であり、地域特色を生かしたシンポジウムの方が成功する可能性が高い。

7. 学生に関して

- (1) 全国の大学のなかで、ベストテンにランクされる高い就職率は、就職活動にたずさわっていただける教職員の努力によるものと評価できる。その成果は受験生向けの広報活動に活かして欲しい。
- (2) 心の健康や障害に問題のある学生に対する取り組みも効果を上げている。この問題は今後も増加すると考えられ、更なる取り組みを期待したい。
- (3) 退学者が増加した年度もあったが、その原因は様々であろう。授業についていけなかったのか、経済的な問題か、健康問題か、友人問題かなど、大学サイドに起因するのか、学生サイドに起因するのか、しっかりと原因把握を行い早め早めの対策を立てることが望ましい。特に孤独感についての対策としてはアドバイザー制度の活用を望みたい。
- (4) 近年多発している薬物違反、飲酒運転など違法とされる問題についての指導には十分留意されたい。喫煙については、違法ではないが、自身の健康上、他人への健康被害からみて禁煙を薦める取り組みが必要である。しかしながら、喫煙を全て廃止することは困難であろう。分煙施設の設置、または、建造物外での喫煙場所の設定が望ましい。構内敷地内で全面禁止を行うと、隠れて喫煙したり、構外の民家近くで喫煙、ポイ捨てが起きる可能性もある。決められた場所で喫煙することで、学生が社会的ルールを理解し、守るような指導を行う方が、教育上ベターと思われる。
- (5) 多くの大学で無気力な学生への対応が問題となっている。全入時代、推薦入試による弊害もあるが、将来目標もなく、大学に入学してきた学生自身の問題の方が大きいであろう。これらの学生に「やる気」を起こさせ、能力を引き出す取り組みが求められている。特に1学年目が重要である。単に、高校の復習となる基礎科目の

増加だけでは解決できないと思われる。明確な答えについて提言できないが、教育振興基本計画にのっとり、多くの大学で行われつつある授業のレベルアップを図るための研修に参加するなど、学部全体で検討すべき課題と思われる。

委員会、センター、施設に対する評価

委員会名	教務委員会	委員名	波田野義比古、市川進一、新井祥生、 川田邦明、高橋歩
<p>評価委員による評価点* (3 3 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新カリキュラムがスタートしたが、その成果は今後を待つことになる。 2. 新カリキュラムでは、学生基礎力の向上に為の基礎科目の増加、NR 資格のための講義など、教員の負担も増加した。又、そのしわ寄せが専門科目の受講に及んでいる。2年後の改正に当たっては、教員の負担の平均化、講義内容の重複を無くした科目の整理、重点受講させたい専門選択科目の設定、助教層の教育参加による一部の教員の負担過多の解消、問題点として提起されている研究室の再編などについて、検討されたい。 3. 管理栄養士資格取得を単独で行うには、施設、教科など、多大な費用がかかる。新潟医療福祉大との教育連携で進めるべきである。 4. 教員組織とカリキュラムの間で、かなり基本的な重要問題が内在していることが認識されているが、それに対してどのように対応していくかについて、委員会としての姿勢がやや不明確であるように見えます。平成19年度の新カリキュラムが導入され、委員会としては新カリキュラムへの円滑な移行に意を尽くしていることが伺えますが、新カリキュラムを作る段階で、「重要問題」への対応が検討しきれなかった経緯が今一つ理解しにくい気がします。 5. 新潟医療福祉大学との教育連携の目的はどの辺りにあり、それと上記の問題と関係があるのかわからないのか、少なくともこの資料では把握出来ません。 6. どの様な教科構成によりどの様な学生を育てたいかが不明確なのではないか。 7. 教員数の減少は深刻な問題であると思う。カリキュラム委員会と合同で対処を考えるのはどうであろうか。 			

* 3名の外部評価委員による5段階評価

委員会名	学生委員会	委員名	太田達夫、鯨坂勝美、川田邦明、 重松亨、三宅紀子
<p>評価委員による評価点 (4 5 4)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全入時代によって、今後も多様な学生が増加して、学生委員会の指導、活動の重要性は増加するであろう。増加する心の問題、他大学で多発している薬物問題、社会的マナーの欠如の解決など学生委員会の役割は大きい。 2. 孤独感がない生活を送れる為の友人を作る支援の試み、学力低下に悩む学生の援助など、アドバイザーシステムの積極的活用を期待したい。 3. さまざまな課題について、極めて個別な対応が必要な諸課題について、積極的に対応していることが伺われる。 4. 学生に関する種々雑多な問題を処理されていることには敬意を表する。 5. 問題点を解決するには学生委員会のみでは不十分なのではないか。 			

委員会名	入試委員会	委員名	藤井智幸、鯨坂勝美、梨本正之、 佐藤眞治、米田照代、中村豊
<p>評価委員による評価点 (4 4 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 入試委員会と広報委員会の活動は連動している。委員会メンバーも同じであり、両委員会の統合が望まれる。 2. SPP, SSH など高大連携活動、高校訪問、が受験生増加にどう寄与しているか、これまでの結果について解析し、次の活動に活かして欲しい。 3. 将来的には、薬学部との相互受験の是非、応用生命科学部の学科別受験の是非についても、その検討、意思統一を進めて欲しい。 4. 入試に関わる諸課題について、適切な活動が行われていると思います。 5. 志望学生を増やし、なおかつ“実力”のある学生を育てるために入試委員会は重要な役割を果たすはずである。 6. 指摘されているように薬学部と共同歩調を取る必要がある。 			

委員会名	広報委員会	委員名	藤井智幸、鯨坂勝美、梨本正之、 佐藤眞治、米田照代、中村豊
<p data-bbox="225 465 826 501">評価委員による評価点 (4 4 4)</p> <p data-bbox="225 562 408 598">〔コメント〕</p> <ol data-bbox="225 611 1370 1603" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="225 611 1370 692">1．入試委員会と広報委員会の活動は連動している。委員会メンバーも同じであり、両委員会の統合が望まれる。 <li data-bbox="225 705 1370 837">2．SPP, SSH など高大連携活動、高校訪問が受験生増加にどう寄与しているか、これまでの結果について解析し、次の活動に活かして欲しい。費用対効果で重点的広報活動を策定して推進されたい。 <li data-bbox="225 851 1370 931">3．多彩な広報素材が作成されているが、学部、両学科の受験生に対する最大の「売り」をどう発信するか、検討されたい。 <li data-bbox="225 945 1370 1361">4．広報の目的を志願者確保に限定して、一定の活動が行われていることが認められます。また、問題点として提起されている課題も妥当なものと思われ ます。ただ、問題点として整理したことについて、具体的にどのように解決 を図っていくかについての道筋は必ずしも明確には示されていません。また、 20年度の活動目標の中に十分反映されているとも言い難いように見えます。 その辺りの活動の継続性について、一層の配慮が必要かも知れませんが、志 願者確保以外の広報活動についても、どこかで組織的に行う必要があるよう に思います。 <li data-bbox="225 1375 1370 1456">5．本委員会の活動にとって入学生の確保があることは理解できるが、長期的 に見るならばそれだけでは不十分なのではないか。 <li data-bbox="225 1469 1370 1603">6．広報素材として、教員の学術的な成果を実用化に結びつけること、薬大が 少なくとも新潟県の学術活動に貢献できる存在であることなどが県民に理解 されるようにすることが重要ではないか。 			

委員会名	予算・財務委員会	委員名	平岡昇、波田野義比古
<p>評価委員による評価点 (4 4 3)</p>			
<p>〔コメント〕</p>			
<ol style="list-style-type: none"> 1．予算・財務の基本は「入るを計りて、出るを制す」である。受験生の増加、入学者の確保が急務である。教員補充、施設の拡充、2期工事負担など、費用を伴う課題が山積みである。支出を伴う事案の優先順位を定め、少なくとも予算の計画を作成、周知徹底を行いたい。 2．学部毎の予算、決算管理は、必要だが、厳しい応用生命科学部財政を考えると安定的財政を有する薬学部との設備関連の負担割合など、大学全体として再検討すべきであろう。(高額共通機器の維持・購入、工事費負担など) 3．開学部以降、増加が見られる人件費(教員、事務職員)と教科増大に伴う経費の削減に向けたスリム化も検討される時期に来ているかも知れない。 4．将来計画委員会との統合を検討されたい。 5．人件費を含めた予算体系の中で学科の運営が行われていることに敬意を表したいと思います。予算として500万余の”黒字”予算はかなり運用上の困難があるようにも見えます。予算に関する中期的な計画立案の必要性があるのかもしれない。 6．苦しい財務状況は理解できる。 7．研究費の配分を適正化するにはどのような方法がよいと考えるか。 			

委員会名	プロジェクト関連委員会	委員名	及川紀久雄、川田邦明、 梨本正之
<p data-bbox="225 465 826 501">評価委員による評価点 (3 3 2)</p> <p data-bbox="225 562 408 598">〔コメント〕</p> <ol data-bbox="225 611 1366 1267" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="225 611 1366 790">1．国際交流、海外学会発表は、大学のレベルアップ、教員の研究意欲増進に重要であることに異を挟まないが、国際プロジェクトなど多大な費用を伴うものは、学部の厳しい財政事情からみて、当面は外部協賛金、寄付で進めるよう、努力されたい。 <li data-bbox="225 801 1366 891">2．国内学会出張は基本的には、研究室予算から支出すべきである。そのためにも、研究費確保のため、外部資金導入を積極的に進めたい。 <li data-bbox="225 902 1366 1126">3．本委員会の役割が今一つ分かりませんが、学部として推進する国際プロジェクトの実施が目的であるとすると、推進すべきプロジェクトの構築への道程をもう少し整理して実施する必要があるのかも知れません。海外出張実績に挙げられている「補助」の額はかなり少ないので、逆にこのような補助を行うことが本当に必要なのかは再検討の余地があるように思います。 <li data-bbox="225 1137 1366 1227">4．新潟薬大の研究活動を国際化するためにはどのような主題を設定したらよいかに関する議論が見えてこない。 <li data-bbox="225 1238 1366 1267">5．国際学会の出張はプロジェクト関連委員会とは関係ないのではないか。 			

委員会名	共通機器委員会	委員名	鯨坂勝美、石黒正路、市川進一、川田邦明、佐藤眞治
<p>評価委員による評価点 (4 4 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 指摘の通り、薬学部との合同委員会に統一されることが望ましい。保守、点検、更新、新機器の導入など費用のかかるものが多いので、相互の意志統一を計り、更新、新機種の導入に際しては優先順位を決めた年度計画を進めたい。 2. 合同委員会にすることにより、委員の削減を行い、教員の負担軽減を行いたい。 3. 薬学部との間での連携を進めていることは重要なことだと思われます。基礎的な機器は、薬学部とかなり共通であると推測できるので、大学全体としての危機管理体制の構築への取組は必要なことだと思います。 4. 薬学部と共同で機器管理を行うことは両学部の研究分野がかなり重複しているので賛成である。 5. 機器は保守契約を結ぶ方がいいのではないか。 6. リース制度は活用しないのであろうか。 			

委員会名	実験動物施設委員会	委員名	佐藤眞治、市川進一、三宅紀子
<p>評価委員による評価点 (3 5 4)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 薬学部との合同統一委員会として統一されたことは評価できる。 2. 大学全体としての実験動物の管理体制が整備されたことは評価できると思います。 3. 生命倫理に関する議論はなされていないのであろうか。 			

委員会名	組換え DNA 委員会	委員名	梨本正之、市川進一
<p>評価委員による評価点 (3 3 .)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 特に問題なく運営されているので評価は差し控えたが、薬学部との関連はどうなっているのか、共通問題があるならば、統合も検討したい。 2. 日常活動として必要なことが行われたということだと思います。 3. 生命倫理に関しては全く問題がないのだろうか。 4. 実験規制に関する討議を知りたい。 			

委員会名	RI 委員会	委員名	梨本正之、市川進一
<p>評価委員による評価点 (2 3 .)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 活動については特にはないが、薬学部との関連はどうなっているのか？ 2. 日常活動として必要なことが行われたということだと思います。 3. 委員会独自の活動はないのであろうか。例えば、安全性に対するガイダンスなど。 			

委員会名	図書委員会	委員名	三宅紀子、中村豊、重松亨
<p>評価委員による評価点 (4 4 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 薬学部との運営委員会との統合が望ましい。学部毎の個別の事案については分科会で対応できると思われる。 2. 運営委員会のコメントを参照されたい。 3. 学術雑誌の購入は継続性と当座の必要性を両立させる観点で、どの大学においても困難な問題ですが、委員会として努力されていると思います。図書館運営委員会との関係がやや分かりにくいのですが。 4. 比較的余裕がある状態で雑誌や図書の選定を行い得る状況にあるのであろうか。 5. 全国的に見て、図書に関する(相対的)予算は縮小傾向にある(図書費の高騰)。 			

委員会名	図書館運営委員会	委員名	武内征司(図書館長)
<p>大野智、藤原英俊、星名賢之助(薬学部) 三宅紀子、中村豊、重松亨(応用生命科学部) 白鳥寛、滝沢紀子、五十嵐芳美(図書館)</p> <p>評価委員による評価点 (4 5 4)</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究フィールドの拡大に伴う雑誌の増加は予算上無視できない。アンケートの実施、電子ジャーナル化によって、雑誌の見直し、費用削減を計ったことは評価できる。雑誌の見直しは、定期的に進めたい。 2. 特定の研究室にのみ、必要とされる雑誌については、研究室での購入が望ましい。 3. 単行本についての拡充は、各研究室保有の目録公開と利用出来る制度、不要書籍の図書館への寄付(OBからの寄付)など考えたらどうか? 4. 電子ジャーナル化を実現されたことは重要な進歩だと思います。市民開放について具体的な取組が始まったことは、周辺地域への貢献の観点で評価できると思います。 5. 限られた予算で図書や雑誌の購読を継続的に行わないといけないご苦労は理 			

解できる。

6. 世は電子ジャーナルに向いて進んでいるようであるが、冊子体は知的財産の管理という観点から見ても重要なのではないか。
7. 図書館の民間への開放は、地域における文化の担い手としての大学にとって必要ではあるが、管理をきちんと行える体制を取っておく必要がある。どのような人物に対して入館を拒否できるか、またその理由はなどである。

委員会名	地域交流委員会	委員名	小西哲也、三宅紀子
評価委員による評価点 (4 4 4)			
〔コメント〕			
1. 地域交流講座の開催は、地域還元必須であり、間接的には受験生獲得に寄与している。今後も積極的に開催されたい。			
2. 薬学部との共通委員会の官産学連携推進センターに集約されたことにより活動が更に発展していくことが期待できる。			
3. 地域交流講座が好評のうちに実行されたことは評価できると思います。			

委員会名	IT 委員会	委員名	米田照代（応用生命科学部）
高中紘一郎、福本恭子、神田循吉（薬学部）浦上弘、梨本正之（応用生命科学部）生野昭雄（事務部）武内征司（図書館長）白鳥寛（図書館）杉崎亮（法人本部）			
評価委員による評価点（ 4 5 4 ）			
〔コメント〕			
1．インターネットサービスの整備が順次進んでいることは評価できる。			
2．他大学とのサービス網の増加、学生のネット利用による、ハッカー対策、ウイルス対策、情報の流出についての対策を急ぐこと。			
3．学内外の IT 環境が順調に整備されていると思います。			
4．講義室でのパソコン使用に対する対策は取っているのでしょうか。			
5．遠隔授業などにも対処することを議論すべきではないでしょうか。			

委員会名	防災環境委員会	委員名	川田邦明、新井祥生、市川進一、浦上 弘、中村 豊
評価委員による評価点（ 4 4 3 ）			
〔コメント〕			
1．環境対策は、良く整備されている。			
2．防災に関しては、どこまで、行われているか不明であるが、防災訓練、地域との連携、地震時での教育ライフラインの整備など、検討されたい。			
3．防災、環境問題は、単独学部で行うべきではなく、薬学部を含めた全学で取り組むべきである。そのことで、委員の削減も可能になると思われる。			
4．廃棄物処理の実務に関して、整備された体制が機能していると思われます。			
5．利用者（学生、研究者）に対するガイダンスは行わないのか？			

委員会名	自己評価委員会	委員名	佐藤眞治、武内征司、浦上 弘、 太田達夫、太田卓馬（事務部）
<p>評価委員による評価点（ 4 5 4 ）</p>			
<p>〔コメント〕</p>			
<ol style="list-style-type: none"> 1 . 自己評価制度を進め、基準協会の審査によって、相当の評価を得たことは評価したい。 2 . 自己点検・評価表の記載については、教員間で微妙な差が見られる。記載の統一を指導されたい。特に、各教員の担当コマ数を明確に記載されたい。 3 . 学生による授業評価は、教員の授業改善に役立つ点もあるが、学生の無責任な評価も目立つ。各教員は参考として活用すべきであろう。教員から見た学生の評価も実施して、相互の評価の解析を行えば、より効果が得られると思う。但し、実施する作業努力と実際の効果の兼ね合いになるかも知れない。 4 . 自己評価委員会として、自己点検・評価表の作成、学生による授業評価アンケートの整備（教員コメントの記述と WEB による公表）、大学基準協会の審査受審という困難な課題を行うとともに、外部評価への準備を行ったことは、高く評価できます。なお、評価結果を具体的な改善に繋げる実務的な道筋が明確になるとさらに充実が図られると思われま 5 . “ 自己評価 ” をどの様にしたら “ 公平 ” であるかに関する議論の内容を知りたい。 6 . 学生からの授業評価をどの様に位置づけているかを知りたい。 			

委員会名	就職委員会	委員名	武内征司、 及川紀久雄
鯨坂勝美、浦上弘、市川進一、川田邦明、佐藤眞治 田中竜太、塚田正之（事務部学生支援グループ） 廣瀬利雄、坂爪しう子（事務部就職支援室）			
評価委員による評価点（ 4 5 5 ）			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> 1．極め細かな活動によって、高い就職率を達成できたことは高く評価したい。この成果は、受験生増加に向けて、広報活動に活かしたい。 2．近隣に会社が少ないバイオ、医薬業に比べ、食品関連業への就職が多いので、バイオ、医薬関連企業の開拓を進めて欲しい。 3．今後、大学院卒業の就職希望者が増えるが、不況で就職難が見込まれるので、早めの対策を進めていきたい。 4．個々の学生の事情にも及ぶ、熱心な就職支援活動が行われていることが認められる。特に、委員会と各教員との間で連携した活動の結果、高い就職率を実現したことについては敬意を表したい。 5．就職委員会の活動の結果、学生の就職状況も良好であることは心強い。 			

委員会名	倫理審査委員会	委員名	浦上 弘
三宅紀子、梨本正之、市川進一、平山匡男（応用生命科学部）、渡邊賢一（薬学部）、豊島宗厚（新津医療センター病院長）、小林一三（普談寺住職）			
評価委員による評価点（ 4 5 3 ）			
〔コメント〕			
1．今後の研究分野の発展と共に、倫理審査を伴う事案が増大することが予測される。薬学部との合同委員会の設置が検討される中、教員の委員削減を行ってでも、公正な立場にある外部からの第3者委員の増員の必要があろう。			
2．倫理問題が生ずる危険性の高い問題については、リスクマネジメントの規定を検討されたい。			
3．研究に関わる倫理審査委員会が、弁護士の意見を参考にして結論を出す経験をされたことは重要な意味があるものと思われます。その意味で、委員会は十分な機能を果たしているものと評価できます。			
4．倫理審査委員会は学生ばかりでなく教職員にとっても重要であると思う。			
5．いわゆる“セクハラ”、“パワハラ”、“アカハラ”などはこの委員会の所轄事項ではないのか？			

委員会名	大学院教務委員会	委員名	小西徹也、梨本正之、 佐藤眞治
評価委員による評価点（ 3 3 . ）			
〔コメント〕			
1．大学院の教務委員会として必要な実務が行われたと認められます。			
2．世界標準レベルの大学院教育の内容を知りたい。			

委員会名	大学院入試委員会	委員名	石黒正路、米田照代、 三宅紀子
<p>評価委員による評価点 (3 3 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <p>1. 入試の実務が粛々に行われ、そこで入試委員会が一定の機能を果たしたことは認められます。ただ、課題としてあげられていることは、入試問題の点検体制、面接の実施方法など、かなり基本的な問題であることから、早急な具体的対応が必要だと思われます。進学希望者の増加について20年度の課題として挙げられているのは、ある意味で妥当なことと思われませんが、経済的支援に加え、キャリアパスとの関係を踏まえた、大学院における学習の到達目標の明確化などが大学院課程全体として取り組むべき課題もあるように思います。</p> <p>2. 活動目標などに記載されている事項は、早急に取り組むべき課題であると考えます。</p>			

委員会名	博士後期課程設置委員会	委員名	浦上 弘、武内征司、 川田邦明
<p>評価委員による評価点 (4 4 3)</p> <p>〔コメント〕</p> <p>1. 1年設置が遅れたことは、反省材料であるが、努力の甲斐があって、認定されたことは朗報である。</p> <p>2. 新しい取り組みを行う際に、良かれ悪しかれ文科省との折衝が必要になる。文科省に「顔の利く」職員の育成は急務であろう。</p> <p>3. 博士課程進学学生のポスドク問題については、早めに対策を講じておくことが望ましい。</p> <p>4. 本委員会の設置目的に即して、申請時期の変更への対応しながら、設置申請の準備を行ったことが認められる。</p> <p>5. 後期課程が設置されたとのことで、活動の成果が得られたことを祝したい。</p>			

委員会名	将来計画委員会	委員名	平岡 昇
波田野義比古（教務委員長） 太田達夫（学生委員長） 藤井智幸（入試・広報委員長） 武内征司（就職委員長） 鯉坂勝美（教授会選出委員）			
評価委員による評価点（ 3 3 2 ）			
〔コメント〕			
1．費用のかかる将来計画は、財政の健全化が基本である。従って、予算委員会との十分なすりあわせが必要である。			
2．委員は各委員会委員長から選出されていて、学部全体の意見が反映されていることは評価できる。然し、それぞれの利害関係から、意見統一が難しいことも欠点となる。それぞれから出た計画を、財政と相談の上、優先順位を付けて一つずつ進めて欲しい。			
3．管理栄養士養成は新潟福祉大学との連携で推進すべきであろう。医専の学部化は、現状では慎重に検討すべきと考える。			
4．教授会で設置見送りの結果が出た後の対応について、議論が煮詰まらず、今後の方向性を打ち出し切れteいないように見えます。			
5．新潟薬大の委員会の中で最も重要な委員会の1つであると考えている。			

委員会名	F D委員会	委員名	武内征司、浦上 弘、佐藤眞治
評価委員による評価点（ 4 4 2 ）			
〔コメント〕			
1．F D活動は、自己点検評価委員会、教務委員会と活動内容が類似していて、F D委員会を独立させた意味が読めない。委員会の乱立は防ぎ、関連委員会で、課題の一つとして取り組むべきである。			
2．F Dの実質化についてそれなりの努力が払われていることは認められます。特に、通常、回答率が下がるWEBでの授業評価で登録率が90%を超えたというのは、ある意味で驚異的なことだと思います。また、授業評価アンケートを教員のコメント付きで公開することが行われたことも十分評価できます。全体として着実な整備が行われていると思います。			
3．非常に重要な委員会であると考えている。			

委員会名	産官学連携推進 センター運営委員会	委員名	小西 徹也
浦上 弘、平山匡男（応用生命科学部）、中村辰之介、渡邊賢一（薬学部）、 茂木弘邦、渡辺健太郎（事務部）			
評価委員による評価点（ 4 3 4 ）			
<p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1．大学全体の推進組織としてスタートしたことは評価したい。今後の更なる発展を期待したい。 2．外部との共同研究、資金供与が増大する中、契約、成果（商品化、知的財産権）の権利帰属、特許発明者の報奨制度など規定の明確化早急に進めることを提案する。 3．委員会としての業務が相応に行われていると思います。 4．知的財産保護などに関しどのような様な対策を取っているかを知りたい。 			

平成19年度 外部評価委員による評価結果

平成 21 年(2009 年)1 月 30 日

編集 新潟薬科大学応用生命科学部自己点検・評価委員会
平岡 昇(委員長)、武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治

